2024/3/11 No.710 発行
無断転載・加工禁止
※教員研修等にお役立てください。

教職研修資料

〔発行〕教育開発研究所
東京都文京区本郷 2-15-13
TEL (03)3815-7041
FAX (0120)462-488

■学校経営のポイント

子どもたちの成長を伝えよう

喜名　朝博

年度末、学年のまとめとしての成績処理の時期となった。教師はその職業的特性から、子どもたちの課題を見出すことに長けている。子どもたちのできないことや分かっていないことは、自らの指導に責任があると考えるからだろう。逆に、子どもたちができるようになったことへの共感度は低い。これも、「できるようにする」という自らの目標に引き寄せて考えてしまうからかもしれない。

「褒めること」と「承認すること」

「子どもは褒めて育てる」という言葉がある。褒めれば自信がつき、モチベーションが向上すると考える。心理学者であるアルフレッド・アドラーは、逆に「褒めてはいけない」と言った。褒めることは、能力のある人が能力のない人に下す評価であると説明する。褒めて育てると、褒められることが目的になってしまい、そのために他者と比較するようになるというデメリットも指摘されている。

大事なことは、その子の存在や価値を認めていくこと、承認することである。評価することではなく、教師としての認識を伝えていくことが大切だ。「できるようになってすごいね」は教師の評価だが、「練習してコツをつかんだからできるようになったんだね」は教師の認識であり、そうした子どもとの対等な関係性のなかで、信頼感と心理的安全性が生まれる。

子どもたちは、どちらも「褒められた」と認識するかもしれない。しかし、後者の言葉かけの方が次の学びにつながるはずだ。

自分の成長に気づかせる

逆上がりができたことや、かけ算の九九を覚えるなど、実感を伴う成長は子どもたちも自身も気づくことができる。しかし、深い思考ができるようになったことや、学習方略が身についてきたことなどは、誰かが指摘しなければ自分では気づきにくい。そんな実感を伴いにくい成長に気づかせてあげることも教師の役割である。その際、その子の行動や努力と結びつけてあげることがポイントとなる。「みんなの意見をよく聞いて考えられるようになったから、深く考えられるようになったんだね」というように、その子が気づいていない努力と結果を結びつけることで、努力することの価値に気づくようになる。

個人内評価を自己評価につなげる

昨年4月の子どもたちの様子と1年後の今を比べれば、どの子も着実に成長しているはずだ。ただ、その成長のスピードは子どもによって異なるということを忘れないようにしたい。

子ども個人の進歩を評価するのが個人内評価であるが、その主体は教師などの第三者である。個人内評価を伝えることで、子どもたちは自らの成長を意識するようになるが、それを自己評価につなげることが必要だ。

「できた」「できない」ではなく、自分はどれくらいできているのかという自己評価の基準をもつことが成長につながる。「80%できている」と自己評価した時点で、100%にするための方策がすでに思い浮かんでいるはずだ。「どれくらい分かっているか」「どれくらいできているのか」と自問することでメタ認知力が育まれていく。

子どもたちの成長・教師の成長

何かと忙しい3月だが、子どもたちの成長に思いを馳せ、それを子どもたちに伝えていきたい。子どもたちの成長を自分の喜びとできるのが教師という職の尊さである。さらに、子どもたちの成長を通して自らの指導を振り返り、課題を見出すことが教師としての成長につながっていく。教師の成長もまた子どもたちの成長と相似形である。

（きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問）

●子どもも大人も安心していられる「子どもが主語」の学校のつくりかた。**《好評発売中！》**

「子どもが主語」の学校へようこそ！

森万喜子【著】　四六判／定価 2,420 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは，小社HP　https://www.kyouiku-kaihatu.co.jpをご利用ください。